

〈研究ノート〉

北原白秋の童謡論における幼児の詩 — 「隆太郎の詩」にみられる歌謡性 —

田 中 泉

要約

雑誌『赤い鳥』に投稿された童謡作品の選定を通して、「童謡」というジャンルにおさまらない「自由詩」を見出し、学齢期の児童に向けて自由詩の創作を奨励した北原白秋は、その流れの中で幼児の詩にも注目するようになった。白秋は幼児の詩について、「童謡」と「自由詩」両方の特質があるとみなし、幼児の発話は自然と歌謡の調子を帯びるものであるととらえている。本稿では、幼児詩の具体例として白秋の長男・隆太郎の詩をとりあげ、幼児の詩にみられる歌謡性が、音声言語の発達過程にある幼児の発話にみられる「繰り返し」という特質と関連するものであることを指摘した。

キーワード 北原白秋、童謡、児童自由詩、幼児の詩

目次

1. はじめに
2. 自由詩と童謡
3. 児童の詩と幼児の詩
4. 「隆太郎の詩」における歌謡の調子
 - 4.1 同じことばの繰り返し
 - 4.2 同じフレーズのくりかえし
 - 4.3 同じパターンの発話をことばを入れ替えながら繰り返す
5. おわりに

1. はじめに

「なるべく学齢前の子供たちの童謡を本誌では歓迎します。お母さん方も平生お子さんたちの獨りごとをよく聞きとめてノートにしるしていただきたいのです。さうしたものはみんないい詩になってゐるのです^[1]。」

これは、大正11年創刊の子ども向け雑誌『コドモノクニ』において子どもたちの詩を募集し、その選出にあっていた北原白秋が読者に向けて呼びかけた一文である。白秋は、大正7年の創刊時より雑誌『赤い鳥』に自作の童謡を掲載しつつ、子どもを含む読者から投稿さ

れた童謡の選者を務め、大正期における童謡文化を盛り立てていった。やがて、子どもたちからの投稿作品の中に従来の童謡というジャンルには収まりきれないもの、「歌われる」よりも「静かに読まれる」方がふさわしい作品を見出した白秋は、それらを自由詩としてとらえ、子どもたちが創る「児童自由詩」に注目する。そして、童謡よりも自由詩に児童の本質が現れると考えた白秋が大いに奨励したことにより、『赤い鳥』には全国の児童から自由詩作品が寄せられ、学校では教師が自由詩の創作を指導するようになるなど、「児童自由詩運動」といわれる文化的流れがつくられていった。

そのような中、白秋は児童のみならず学齢前の幼児がつぶやく「詩」にも目を向ける。幼児について、「通例の会話や独語でも、よく注意してさへ聴けば、みんな詩としてのリズムを持たないものはないと云つてよいとおもひます^[2]」と述べ、そうした幼児の発話が詩であるとともに「おのづから歌謡調を成す^[3]」、つまり「自由詩」と「童謡」両方の特質を備えたものであるとして、冒頭の呼びかけ文にあるように幼児の詩を積極的に募集するようになったのである。そして昭和7年には『コドモノクニ』に掲載された幼児作品を中心に集めた、『日本幼児詩集』を刊行する。

幼児のつぶやきは「おのづから歌謡調を成す」ものである——これまで乳幼児の観察を通して、その発話や音声コミュニケーションにみられる音楽的側面、および音声言語の発達基盤におけるリズムの役割などに注目してきた筆者にとり、こうして白秋が幼児の発話をとりあげ、その歌謡性に着目したことは大変興味深く思われた。そこで、彼が幼児の詩をどのようにとらえていたのかを考察し、また、実際の幼児の詩における歌謡性をこどもの発話にみられる特質に照らし合わせて具体的に検討するため、白秋の長男・隆太郎の詩を解説とともに掲載した記録のなかから例を挙げて考察する。

2. 自由詩と童謡

読者から投稿された童謡作品を白秋の選評と共に掲載していた『赤い鳥』では、大正10年11月号より、その掲載欄に「自由詩」という名称を用いるようになった。先に述べたように、子どもたちの投稿作品のなかから、それまでの「童謡」というジャンルには収まりきれない、新しい感覚の詩が生まれてきたからである。

「童謡」と「自由詩」の違いについて、白秋は形式と内容両方の面から区別しているが、彼自身も指摘しているように、その区別は明確なわかりやすいものではない。両者の区別については、これまでも研究がなされてきており、この点についてはすでに別稿^[4]にもまとめているため、ここでは「リズム」と「調子」という観点に注目したい。

『赤い鳥』において、投稿作品の中から選出されたものを掲載する欄に「自由詩」という名称が用いられるようになったのは大正10年11月号であるが、その翌月号において、白秋は「童謡」と「自由詩」との区別について以下のように解説している。

童謡は調子を、とにかく俚謡としてととのへねばなりません。詩の方は主としてリズム

本位のもので、静かに歌ふとか味わふといふ方がだいじです。で、童謡の方は可なり大ざっぱでやれますが、詩の方ですと、もつと細かくリズムが動いてゆかなければなりません。さうしてもつと自由です。子供たちに詩をおすすめするのは、それでやると、一番ほんたうの気持ちが出れるからです。ただ童謡の方では、思ひきつて自由でリズム本位があります。それから自然そのままな調子で出るのがあります。さうしたのはかまひません。しかしさうしたのと、自由詩との区別は子供のでは中々むつかしいので、子供自身にも困るのでせう。で、とにかく、

「こどもがちやうちん
つけたつけ、
私もちやうちん
つけたつけ。」

とか、

「夕焼小焼
みかんのかは。」

といった風のは童謡味の勝つたもので、

「まりよころげよ、
地面にころげよ、
石でつかれよ、
ぼんぼんあがれよ、
松の木にとどけよ、
二間あがれよ。」

かういつたのは本来の自由詩です。

「母さん
風がふくといふのは
木がいごくの。」

これもさうです^[5]。

つまり、童謡の方は「調子本位」で、自由詩の方は「リズム本位」ということであるが、童謡は「歌う」ためにふさわしい形式となるように調子を整えたものであり、また、作曲者が旋律をつける場合を考慮して字数を揃える必要がある。そのため、同じことばや同じフレーズの繰り返しが多用されることとなり、繰り返しから生じるリズムによって音楽的な特徴が前面に出てくる。一方、自由詩のリズムという点については、「ふだんのみまの言葉で、心の感じそのまゝのリズム^[6]」という言い方もされているように、あえてことばの字数を揃えたり、調子を整えるために同じフレーズを繰り返したりするのではなく、子ども自身のありのままのことばの中にみられることばの繰り返しなど、おのずから存在する自然なリズムということになろう。

このようにして白秋が「童謡」と「自由詩」とを区別し、後者に重きを置いた姿勢については、「『子どもの歌』としての童謡とは縁がうすいのではないか。白秋が張り切れれば張り切るほど、そこには白秋好みのすばらしい作品が現われ、そこに新しく展開される芸術華園には、童心を基礎にした鮮やかな感覚詩という、在来なかった美しい花々が咲き競い、もう『子どものため』などという命題は忘れられてしまった^[7]。」という指摘もある。また、彼自身の作品にもそうした児童自由詩にみられる感覚的短詩の影響が色濃く現れていることに注目し、「子どもが歌うための童謡」よりは、芸術作品としての完成度を追求していったという点について論じられることも多い。しかしその一方で、児童自由詩への関心を起点として、白秋が幼児のつぶやく詩にも深いまなざしを向けていったことは注目に値する。以下では、こうした幼児の詩にみられる特徴がどのようにとらえているのかという点を取り上げる。

3. 児童の詩と幼児の詩

子ども自らが創る詩が、「自由詩」と「童謡」とに区別できるととらえた白秋は、さらに幼児の詩と児童の詩の違いにも着目し、次のように述べている。

児童は児童の詩を作ります。…中略…無論彼等はそのままであつて詩人であるとともに、彼等の言葉もそのままであつて、本質的に詩の発想を成してゐるものであります。ただ幼児ほど詩と歌謡とがその言語律の上に渾融されてゐないのは、幾分かづつ分解してゆくものと見なければなりません^[8]。

つまり、幼児の表現において「詩」と「歌謡」とが一体となっているものが、学齢期の児童になるとしだいに分離していくと考えられている。この点は、「幼児の発想の形式なりリズムなりは凡て韻文派であります、小学の上級に上るに従つて、彼等は幾分づつ散文派の表現をなすやうになるのは事実です^[9]。」という見解にも現れているといえよう。また、ここで「幼児の発想の形式なりリズムなりは凡て韻文派であります」と述べられているように、幼児期の詩が歌謡（童謡）と詩との混合体であるのは、幼児のつぶやくそのものが自然と歌謡性を帯びるからである。そうした考え方は、次のような記述にもあらわれている。

兎も角狭義に於ける詩は歌謡とは判然と分つべきものであつて、児童自身の童謡と詩とも、八分通りは分別すべきものでありませう。ただ、あとの二分は幼児のそれと同じく本来の自由律の詩がおのづから歌謡調を成すことがあることも承認しなければなりません^[10]。

では、幼児の発話そのものに自然と現れる「歌謡の調子」とは、どのようなものなのであろうか。先に取り上げた、「詩」と「童謡」を区別する見方にもあったように、歌謡の調子とは、歌としての形を整えるうえでも、あるいは1番、2番と歌詞が変わっても同じ旋律がつけられるようにするためにも、歌詞の字数をそろえたり、同じことばや文を繰り返す必要

が生じる。また、そのような繰り返しがみられる詩であれば、作曲された旋律がないものであっても、朗読してみればことばや文の繰り返しによるリズムが立ち上り、読み手が即興的に節をつけることも容易になされるであろう。

さらに、ことばや文を「繰り返す」という表現については、音声言語の発達過程にある幼児期において特徴的にみられるものではないかと、筆者はこれまでの研究を通して考察してきた^[11]。これらを考え合わせると、幼児の発話がおのずから歌謡の調子を帯びるということには、こうした発達的な特徴がかかわっているのではないだろうか。この点について具体的に検討するために、白秋が注目した幼児の詩として、彼の長男・隆太郎による詩を取り上げてみたい。

4. 「隆太郎の詩」における歌謡の調子

白秋には、妻・菊子との間に隆太郎・篁子という二人の子どもがいた。昭和7年に刊行された白秋編『日本幼児詩集』には、この二人による詩も掲載されている。とりわけ、長男の隆太郎（1922-2004）に関しては、母親が彼の発話を「坊やの言葉」として日記に記録しており、白秋は隆太郎が2歳未満から3歳へかけての間に表現したもののなかから数編を選び、菊子による記録をもとに解説をつけ、「隆太郎の詩」や「隆太郎の詩と註」という題のもとに発表している。ここでは、その「隆太郎の詩」をとりあげ、幼児の詩にみられる歌謡性について検討したい。

先に述べたように、ことばや文の繰り返しは音声言語の発達過程にある幼児の発話の中で頻繁にみられる。隆太郎の詩をみると、それらに歌謡性をもたらしている「繰り返し」という特徴には、いくつかのパターンがあることがわかる。

4.1 同じことばの繰り返し

以下では、隆太郎の詩の中から例を挙げ、そこにみられる「繰り返し」に注目する。（詩の題名は、付いているものと付いていないものの両方がある。（ ）内は、その詩が記録された際の隆太郎の年齢）

「夜食の時」
 ろうそく、ろうそく、
 兵隊さん、
 らつば、らつば。
 兵隊さん^[12]。
 （2歳4ヶ月）

これに対して白秋は、「夜食の時不意に電燈が消えた。そこで火のついた蠟燭が二三本。暗闇にパツと並んで明るかつた。それを見て大喜びで歌ひ出した^[13]。」と解説をつけている。

ここで「歌ひ出した」という表現がなされているように、身近な語を覚えて一語・二語発話をする段階の幼児は、覚えたひとつの語をリズムカルに繰り返し発し、そのリズムによって身体を動かす様子などが頻繁にみられる。その表現がリズムカルであるとともに、語の音を伸ばしたり、音高の違いをはっきりとつけて発することから、歌っているように聞こえるものも多い。こうした、語の繰り返しは以下のような例にもみられる。

「太陽さん」

緑と赤だ。

太陽さんかしら。

林檎だ。林檎だ。

林檎だ。林檎だ。

林檎だ^[14]。

(2歳10ヶ月)

虫、

虫、虫、虫、

虫、虫、虫、虫、

虫、虫、

虫、虫、虫、虫、虫^[15]、

「虫」という語の連呼によってつくられているものについて白秋は、「これは電燈のまはりに羽虫が飛んでゐるのを見て、虫虫を連呼してゐたが、丁度かうしたリズムになつてゐた。これはダダの本元だ。尤も虫はムチといふのである^[16]。」という解説をつけている。

こうした詩の例には、覚えたことばを繰り返しリズムカルに、歌うように発するという幼児の特徴が現れている。

4.2 同じフレーズのくりかえし

「水仙」

お花の匂ひがする。

こつち向いたら、

お花の匂ひがする。

ママ、こつち向いて。

お花の匂ひがする^[17]。

「ママのおつぱい」
 ママのおつぱい、
 お月さまのやうなおつぱいだね。
 あすこに見える
 お月さまのやうなおつぱいだね^[18]。
 (3歳1ヶ月)

これらの例では、「お花の匂ひがする」、「お月さまのやうなおつぱいだね」というフレーズをそのまま繰り返し発している。こうした繰り返しは、通常のおとな会話からみれば冗長的に感じられるため、一部を省略したり、あるいは代名詞などに置き換えて発話するのではいかと思われるが、幼児の場合にはこのように同じフレーズをそのまま繰り返すことが多く、おとなが幼児に向けて話しかける際の発話にもよくみられる。

「汽車の窓から」
 急行列車を通つたので、
 坊やお目目が寒かつたの、
 坊やお目目をつぶつたの^[19]。
 (2歳7ヶ月)

この例のように、「坊やお目目が」とくり返すところも、通常の発話では省略されがちであろう。しかし、幼児の発話を聞いていると、このようにそのつど主語を繰り返しながら、文をつないで発話を続けていることが頻繁にみられる。子ども自身にとっても、こうした繰り返しによってリズムをとることで、発話を持続し易くなっているのではないかと考えられる。

4.3 同じパターンの発話をことばを入れ替えながら繰り返す

また「隆太郎の詩」には、次のように一部分のことばを入れ替えながら、同じパターンの発話を繰り返しているものもみられる。

「夕方」
 たんぽぽ、おねんね。
 てふてふ、おねんね。
 浪じやあじやあ^[20]。
 (2歳3ヶ月)

林檎のにはひがしますね。
 パンのにはひがしますね。

煙草のにほひがしますね。
パパのにほひがしますね^[21]。
(2歳10ヶ月)

坊や三歳(みつつ)、あんよも三歳^[22]。
(3歳1ヶ月)

お二階ゆかう、
おちちもつて、
お紅茶もつて^[23]。

パパごつちよちやま、
ママごつちよちやま、
坊やごつちよちやま、
おふうごつちよちやま、
みんなみんなごつちよちやま^[24]、

このように、一部分のことばを入れ替えて同じパターンの発話を繰り返していくということも、幼児の場合よくみられるものである。これは、言語発達の初期にある幼児にとって、限られた語彙で発話をつなげていく手法であるように考えられる。また、おとなと幼児とのやりとりにおいても、幼児が言ったことに対し、おとなが「じゃあ、〇〇は？」と、それをほかの物や人に適用させるようなことばかけをして、発話を促すことが多い。そして幼児自身も、そうして同じパターンの発話を繰り返すことにより、おとなとの会話が持続することを楽しんでいるのではないかと思われる。

さらに、こうした形式で進んでいく発話は、リズムが生じて歌のようになる場合があるとともに、既存の歌の歌詞にもよく見られる形式である。また実際に、そのような繰り返しによって、子どもが「歌」をつくる例もみられる。例えば、2歳児とその母親との間で、母親が「〇〇ちゃん(幼児の名前)は、ラララララ」というフレーズをつくり歌って聴かせたところ、幼児はその場で目に付く物の名称や家族の名前を自分の名前の部分に当てはめて歌い、それを繰り返して歌をつくっていった事例などを観察している^[25]。

以上のように、幼児の詩に関して白秋が着目した「おのずからな歌謡の調子」には、音声言語の発達過程にある子どもの発話にみられる「繰り返しの多用」という特性がかかわっているのではないかと考えられる。

5. おわりに

本稿では、幼児の詩における歌謡性について、繰り返しという「形式」面での特徴に注目

してきたが、白秋がとらえた「童謡」と「自由詩」の混合体という特質についてより理解を深めるためには、その「内容」についても検討する必要がある。

たとえば、隆太郎の母・菊子による「坊やの言葉」には、次のような繰り返しの多用された発話例も記録されているが、白秋はそれを「隆太郎の詩」として取り上げてはいない。

アスコニモココニモテフテフトマツタ
 テフテフトマツタ
 ムカウニモテフテフトマツタ
 (円月に少し雲が通り過ぎたのを見て)
 オツキサマ、カハイソウ

コケツコトナイタ
 ポツポ
 ポツポ
 アソन्दル
 アソन्दル^[26]

こうした発話があえて取り上げられなかったことに対して、隆太郎自身が「いささか感傷的だったりして、父の詩眼に適わなかったらしい^[27]」と述べているように、白秋が幼児の「詩」— 童謡と自由詩の混合体 — として注目した発話は、「自由詩」に通じる内容を併せ持ったものであった。今後はこうした内容的な面についても考察を進めていきたい。

注

- [1] 北原白秋, 選評, 「コドモノクニ」, 3巻8号, p.3, 1924年
- [2] 北原白秋, 幼き者の詩, 『白秋全集20』, 岩波書店, 東京, p.189, 1986年〔初出: 女性改造, 1926年5月号〕.
- [3] 北原白秋, 児童自由詩鑑賞, 『白秋全集20』, 岩波書店, 東京, p.112-113, 1986年
- [4] 田中泉, 北原白秋がとらえた幼児の「言葉の音楽」(1) — 児童自由詩の推奨から幼児の詩に注目するまで —, 「日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科」, 第13号, p.9-15, 2007年
- [5] 北原白秋, 選評, 「赤い鳥」, 1921年12月号, p.95
- [6] 北原白秋, 選評, 「赤い鳥」, 1920年11月号, p.92
- [7] 藤田圭雄, 『日本童謡史 I』, あかね書房, 東京, p.254, 1984年
- [8] 北原白秋, 児童自由詩鑑賞, 『白秋全集20』, 岩波書店, 東京, p.112, 1986年
- [9] 同上, p.121
- [10] 同上, p.112-113
- [11] 田中泉, 幼児の音声行動にみられる特質 (2) — 「くりかえし表現」について —, 「日本女子大

学大学院紀要 家政学研究科・人間発達学研究科」, 第8号, p.9-18, 2002年
 田中泉, 「幼児の音声行動にみられる音楽的側面に関する研究 — 音・リズム・反復を中心に — 」,
 日本女子大学大学院人間生活学研究科人間発達学専攻博士論文, 2003年

[12] 北原白秋, 隆太郎の詩と註, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.310, 1986年

[13] 同上

[14] 北原白秋, 隆太郎の詩と註, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.424, 1986年

[15] 北原白秋, 隆太郎の詩, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.72, 1986年

[16] 同上

[17] 北原白秋, 隆太郎の詩と註, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.424-425, 1986年

[18] 同上, p.428

[19] 北原白秋, 隆太郎の詩と註, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.314, 1986年

[20] 北原白秋, 隆太郎の詩と註, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.308-309, 1986年

[21] 北原白秋, 隆太郎の詩と註, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.423, 1986年

[22] 同上, p.424

[23] 北原白秋, 隆太郎の詩, 『白秋全集17』, 岩波書店, 東京, p.71, 1986年

[24] 同上, p.72

[25] この事例は、文部科学省科学研究費補助金による「時系列情報の生成に関連する脳活動（ヒトを知る）」（研究代表者：岡ノ谷一夫 理化学研究所・脳科学総合研究センター）の一環として、幼児の「自発的歌唱」に関する観察研究を行った際に得たものである。

[26] 北原隆太郎, 『父・白秋と私』, 短歌新聞社, 東京, p.94, 2006年

[27] 同上

Summary

Kitahara Hakushu's View of Poetries by Young Children
 — Song-like Speech in "Ryutaro's Poetries" —

Izumi Tanaka

Selecting nursery rhymes written by school children in journal *Akaitori*, Kitahara Hakushu discovered new poetries "free verse" distinguish from children's song, and he encourage children to write poetries like that. Then, he became noticed poetries that spoken by preschool children, have characteristics of both children's song and free verse., and they tend to take on song-like form. In this paper, I discuss about "Ryutaro's Poetries" (Poetries by Hakushu's son), from view point the relationship between developmental property of young children's speech and their song-like poetries.

Keywords Kitahara Hakushu, Children's Song, Free Verse by Children,
 Poetry by Children